

宮沢賢治「農民芸術概論綱要」について

Introduction à l'Art des Paysans, par Miyazawa Kenzi

関戸嘉光

SEKIDO, Yoshimitsu

目次

- I 賢治理解の鍵としての〈農民芸術〉
- II その時代的背景
 - (1) 社会的背景について
 - (2) 文化的思想的背景について
 - (3) 室伏高信の『文明の没落』と『土に還る』の影響について
- III 〈農民芸術〉の農民概念について
- I 賢治理解の鍵としての〈農民芸術〉

表題に掲げました「農民芸術概論綱要」のほか、「農民芸術概論」と「農民芸術の興隆」と題する二つの資料が残っています¹⁾。この3資料は、稗貫農学校の校舎をかりて岩手県国民高等学校が開設されたとき、賢治もその「農民芸術」の講座を担当することになり、そのために彼が準備した講義の草案とメモであります。「農民芸術概論」は「綱要」の項目だけを列記したにすぎず、「農民芸術の興隆」は「綱要」のなかの1項について講義のためにヨリ詳細なメモや参考文献などを付記したもので、要するにこの3資料は「農民芸術概論綱要」一つで代表させてよいと思います。

賢治の講義そのものは、講習を受けた生徒伊藤清一の聴講筆記が残っていますので、その概略をうかがうことができます²⁾。賢治の講義の口述筆記は、もう一つ残っています。羅須地人協会で「地人芸術論」と題して1927年2月に行われた講義の要項を会員だった伊藤忠一が筆記したものです³⁾。

岩手県国民高等学校について一言しておきましょう。筆者伊藤清一の「岩手国民高等学校と宮

沢賢治」⁴⁾に詳しく紹介されていますから、それを一読して頂きたいのですが、要点だけ話しますと、開校は1926年(大正15)1月～3月、生徒数は35名、全寮制で県下の町村から推薦された有為の農村青年たち、範をデンマークの国民高等学校にとり、農村振興の中堅となるべき人材の養成を目的とするものでした(デンマークはデンマーク農法やデンマーク体操で有名な独特の小農自作主義の農業国です。内村鑑三の「デンマルク国の話」は有名です)⁵⁾。その指導精神は、デンマークとはちがって、正に時局に順応し国策に追従する皇国精神で、寛克彦(神がかり的憲法学者)や加藤完治(内原訓練所・満蒙開拓義勇軍の指導者)らをもその精神的支柱とするものでした。戦時下に全国的に普及したあの「やまとばたらき」(皇国体操)が既にこの学校で行われていたのです。賢治は、そのような教育方針に別に異和感を持たなかったようです。この学校の教育指導の実際に当たったのは県社会教育主事高野某ですが、前掲伊藤清一によりますと、この人は「加藤完治の薫陶を受けられた直系といわれる方で、宮沢賢治とは特に親しかったようであります」。国民高等学校はこの年の一期だけで幕を閉じます。翌年からは、軍事教練に重点をおいた「青年訓練所」にとつてかわられます。

さて、まず「農民芸術概論綱要」などのこの3篇の本文についてですが、前掲の『校本宮沢賢治全集』の編者は、「三篇とも、昭和20年8月戦災で焼失して現存しない」といっています。では何を底本としたのでしょうか。編者は「昭和42年筑摩書房版『全集』第12巻を底本とした」といっていますが、その昭和42年版は何によったのでしょうか。(その第12巻をみればわかるかも知れませ

んが、いまや簡単に手に入りそうもありません。誰かお手許にお持ちの方に教えて頂きたいと思えます。『校本宮沢賢治全集』の編者は、たて前として自筆稿に拠る、それが無い場合は自筆稿にもとづいたことの実確な印刷物に拠る、と書いています。昭和42年版が自筆稿にもとづいたものでないことは明らかな事実ですから、それが底本として使用した印刷物があった筈で、前掲校本全集第12巻上の編者はそれを明記しておいてほしかった、それが編集校訂者の良心というものではないでしょうか。もっとも、編者は「焼失以前に刊行された十字屋版全集の第六巻をも参照し」と書いて、十字屋版の単純な誤植を二つあげています。そのほかは、十字屋版の「トロッキー」が校本版では「トロツキー」とされ、「もつと明るく生き生きと 生活をする道を見付けたい」の1字アキが校本版ではアケてないことぐらいです（十字屋版では漢字は正字体、促音拗音は半字にしない、反復字には々やムを用いない原則ですが、校本版では新字体、促音拗音には半字、反復の々やムは用いるという原則です。この相違はここでは問題にする必要はないでしょう）。たったこれだけの相違で、十字屋版は参照にとどめられたとすれば、他にもっと信頼できる印刷物があったということになります。それが何か、ぜひ知りたいと思えます。校本全集の校訂上の信頼にかかわることでしょうから。

戦後しばらくして、宮沢賢治全集が新しく筑摩書房から出版されるという噂をききました。戦前戦中の全集は、物資も人手も根こそぎ軍にとられ、かつ軍事目的に直結しない出版は許されない、という苛烈な状況の下で、辛うじてそれに耐えて刊行を敢行したものでした。原稿の探索調査が不十分なのも、誤植が多いのも、やむをえないことでした。しかし不完全な全集という不満は熾りつづけていました。

ですから、筑摩から新しい全集が出る、これは正に朗報でした。出版社側でも、これまでの全集はひどいもので、賢治の真の姿に接するには程遠い、今度の新しい全集によって初めてそれが可能になる、というふれこみでした。大いに期待していました。1956年4月～57年2月全11巻の『宮沢賢治全集』としてそれは公刊されました。しかし

がっかりしました。これまたひどいものだったのです。テキストクリティークの過程についての説明は全くない、語句の意義についての註釈がところどころ付けてあるが、編者の無知を曝露するだけのもの、といった代物で、がっかりと同時に腹が立ちました。その後10年たって、また同じ出版社から今度は12巻の『宮沢賢治全集』が刊行されましたが、私は、またかの思いで手にとることも致しませんでした（校本全集が＜農民芸術＞関係の3篇の底本としたものです）。そして更に10年ほどして『校本宮沢賢治全集』15冊が出版されたのです。これが現在もっとも信頼できるテキストとされています。その通りですが、もちろん全然欠陥がないわけではありません。編者の主観で歪められたり除かれたりした部分があります。いま問題にしている3篇だけに限って言えば、編者は「賢治生前にはこれを秘して発表せず」と書いていますが、「秘して」は編者の単なる主観的推察でしょう。講義のためのメモの如きものは、もともと発表する意図のないもので、わざわざ「秘する」必要もなかったと思えます。

以下、賢治の＜農民芸術＞についてのこの3篇を一括して「農民芸術論」といったり、「綱要」とか「興隆」とが略称する場合がありますと思いません。ご了承下さい。

では、本論に入るといたします。

今回私は「農民芸術論」をとりあげることになりましたが、その理由は、これが賢治理解のための最も重要な鍵であると信じるからであります。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて 無方の空にちらばらう」

「芸術をもてあの灰色の労働を燃せ

ここにはわれら不断の潔く楽しい創造がある」

「髪を長くしコーヒーを呑み空虚に待てる顔つきを見よ

なべての悩みをたきぎと燃やし なべての心を心とせよ」

魂が真底からゆすぶられるような言葉です。詩だの歌だのといった次元の低いものではありません。賢治生涯の誓願の吐露ともいうべきでしょ

う。

だが、これは、私ひとりの独断の評価かもしれません。事実、賢治のこの「農民芸術論」にはさまざまな評価がなされています。鑽仰ともいふべきそれから全くの無視まで、千差万別です。ここではそれをおおざっぱにわけて、三つの型に集約しておきます。

(1) その第一は谷川徹三に代表される型です。谷川は賢治の作品を「賢者の文学」といって、「もし賢治の童話の代表作一篇を挙げよといわれたら、『グスコブドリの伝記』を、詩の代表作を挙げよといわれたら『雨ニモマケズ』を、そして論稿の代表作を挙げよといわれたら『農民芸術概論綱要』を挙げるに躊躇しません。グスコブド리는賢治の理想の人を描いたものであります。イーハトヴォの人々の幸福のために、自ら仕掛けた装置によって、火山の人工爆発をさせるとともに、自己の肉身を文字通り宇宙の微塵となして、無方の空に散らしたのであります。『まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう』という言葉は、グスコブドリの生涯の中にその象徴をもつのでありまして、それこそまた賢治の理想とした生涯であったのであります」⁹⁾。

私は谷川徹三に全面的に賛成です。あえて異を唱えたとすれば、代表作として私なら、童話では「なめとこ山の熊」を、詩では「無声慟哭」を挙げたい、と思うぐらいのことです。

しかし、こんな谷川徹三のような賢治理解は近頃さっぱり流行らなくなったようで、少し残念に思います。いちばん素朴な、それだけに、いちばん根本的な賢治理解だと思ふのですが。

だが、だからちっとも面白くない、凡庸で平俗で偽善道徳的だ、と嫌われたのでしょうか。自己犠牲なんてまっぴらごめんだ、戦時下の軍国主義が俺たちに押しつけた欺瞞だ、今や平和と民主主義の時代、個人が自己の個性を開花させること、これが現代の至上命令だ、という立場からの賢治再評価が戦後の主流となってきています。個性尊重ですから、その主張もみんな個性的で千差万別ですが、どれも谷川批判から出発している点は共通しています。

(2) そこで次に第二の型です。千差万別の谷川

批判ですが、「農民芸術論」を規準にとると、簡単に分類できます。これを批判的にとりあげるか、それとも全然無視するか、この二つです。第二の型は、この「批判的にとりあげる型」で、その代表として、私は中村稔をとりあげたいと思います。彼は「雨ニモマケズ」論争で谷川徹三と渡りあったし、そうして聖者賢治という偶像を破壊した、偶像破壊者として一部で高く評価されていること既にみなさんよくご存知のことでしょう。

中村稔に『宮沢賢治』という著書があります⁷⁾。これをとりあげてお話することにします。中村自身がその「後記」で「現在の私の宮沢賢治観とはかなりのずれがある」といっていますし、そのときから現在さらにはさらに20余年もたっているのですから、これをいま持ちだすのは不適當でもあり失礼でもある、といわれるかもしれません。その通りです。しかし、これはこれで一つの代表的宮沢賢治観なので、現在の中村稔その人とは切り離して取りあげることは許されると思えます。

中村曰く「僕たちは戦争中の体験から『世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない』というような、それだけをとりだせば、支配階級にとってだけ都合のよい言葉の危険を知っている。そして、『おお朋だちよ いっしょに正しい力を併せ われらのすべての田園とわれらのすべての生活の一つの巨きな第四次元の芸術に創りあげようではないか』というような、純粋な情熱と、壮麗な理想に心を惹かれ、心を惹かれながらも、『農民芸術概論』における方法論の貧しさに目を眩らすにはいられない。……こうした方法論の貧しさ。『農民芸術概論』の観念性。」と⁸⁾。中村がここで「方法論」といっている、その意味が正確にはわかりませんが、つづけて「観念性」といっている処から推して、もののみかた、とらえかたの意と解して差しつかえなさそうです。ですから彼は、観念的な貧しい方法論でない、現実的な唯物論的な科学的な方法論に立脚して、

「結論的にいえば、日本農業の機械化をはばんでいるのは、日本の狭少な地勢でもなく、水田耕作の特殊性でもない。そうした自然条件ではなく、それをそうさせている日本資本主義の構造という人間関係であり階級関係である。そして、か

れ（賢治をさす一引用者）はこの第一の現象形態である地主的土地所有制度、言いかえれば地主対小作の対立関係を見失うことによって、すべての機械化の方向を見失ったのだった。……こうした地主的土地所有の問題を、かれがまったく看過したということは、一見おどろくべきことのように思われる。しかしあくまでそれは事実であった」というのです⁹⁾。

賢治が地主対小作の問題をまったく見落としていたとは考えられません（この点については一昨年合宿ゼミでお話しましたから繰り返さしません、その報告要旨「宮沢賢治と社会主義」を参照して下さい¹⁰⁾。しかし、当時の労農運動は、その主流がマルクス主義の階級闘争史観を理論的支柱とするもので、賢治はこれに一応の理解を持ちながら、なお根源的な次元で不満を感じていたことも事実です。

「きみたちがみんな労農党になってから

それからほんとおれの仕事がはじまるのだ」¹¹⁾

これは賢治が労農運動にもっとも接近した時期、1927年3月の作です。賢治の内なる異空間感覚が宗教感情が、こういわせたのでしょう。それを賢治の社会主義路線からの後退とか逸脱とか批判するのは、賢治自身にとってはお門違いと受けとられたことでしょう。

(3) 三つめの型は、「農民芸術論」を全然評価しない、あるいは無視する、という型です。こんにちの御覧のとおりの大それた賢治ブームを演出しているのがこの型で、そのほとんどが詩人、芸術家といわれる人たちです。代表として天沢退二郎の『宮沢賢治の彼方へ』¹²⁾を挙げておきます。

天沢は、何故「農民芸術論」を無視してよいか、いや無視すべきか、その理由をこういっています。「賢治の文学——詩や童話は、断じて、谷川徹三のいうような、『実践者たる彼の本質の一放射としてのみ初めてこれを正しく理解できる』といったものではない。……宮沢賢治もまた、文学であり文学以外の何ものでもなかったといえるのではないか」¹³⁾「いたるところにいる賢治礼賛者・『賢治教』信者たちのように、賢治文学の美しさ（ヒューマニズムやモラリズムまで含めて）を情緒的にのみとらえ、『いいなあ、いいなあ』

と嘆声をあげることは可能である。けれども賢治の作品はそうした嘆声を容赦もなく通りこしているのだ。……その明るい美しさは、賢治が燃やしたそれら暗い不健康な情念の焰なのである」¹⁴⁾。

なにやら深刻そうな感じがしますが、私にはよくわかりません。天沢はカフカの日記の中の「しごと（書くこと）でわが身を救わなければ、ぼくはだめになる。……どんなことがあっても、どんなことをしてでも、ぼくは書くだらう」という言葉を引いて、「カフカの場合と同じく、文学は賢治にとって唯一の救済の手段」であった、といっています¹⁵⁾。そういえるであろう作家・芸術家が存在することは確かです。たとえば画家のゴッホなどがそうでしょう。それは、神を失った近代が、その世紀末に負わねばならなかった宿命だった、そういえると思います。

しかし、これは賢治の場合ではありません。賢治には世紀末はありません。彼は神を見失ってはいません。尊大な自我だけにかじりつかねばならない孤独な近代人ではありません。彼は寧ろ縄紋人です、原始人です。だから彼は身体ごと自然に還ろうと試みたのです。その実現が羅須地人協会であり、その設計図が「農民芸術論」だったのです。

そしてもう一つ、賢治礼賛者とか賢治教信者とかいわれていることについてですが、彼らは殆んど総て生前の賢治と直接交渉のあった人またはその2代目3代目です。それが更にネズミ算的に拡大波及して今日の事態となったのでしょうが、私は、これも天沢とは反対に、彼らこそほんとうの賢治理解者だと思います。不幸にして私は、生前の宮沢賢治に接する機会に恵まれませんでした。せめて、古老(?)の回顧談や学者の生活史研究などに学んで、もっともっと身近に生身の賢治を知りたいと思っています。

II その時代的背景

このように、私は賢治の「農民芸術論」を、その実現形態である羅須地人協会・肥料設計・東北碎石工場などの農民救済の実践活動とともに、彼の生涯の頂点と考えているものでありますが、あのような賢治の世界の成立には当然、それを可能にもし、制約もした歴史的條件が、時代の背景が

あったのですから、それについて次にお話することに致します。

(1) 社会的背景について

まず政治的社会的経済的背景です。

第一次世界大戦の終末期にロシア革命が起こります。1917年です。レーニンの率いるボルシェヴィキ党がツァーの帝政ロシアを打倒して（十月革命）、労働者の社会主義政権を樹立します。これは「必然の王国」から「自由の王国」への人類最初の一步として、世界史的に大きな反響を呼びおこしました。日本も勿論例外ではありませんでした。翌1918年あの米騒動が爆発します。以後、労働者農民の自覚的組織的運動が全国的に活発化します。1923年関東大震災、これを契機に政府は狂気の反撃弾圧に出ます。朝鮮人暴動というデマを流して多数の朝鮮人が市民の手によって街頭で惨殺されました。労働組合の指導者や社会主義の活動家、平沢計七・川合義虎・大杉栄その他が官憲の手によって警察署内で秘密裡に殺されました。地震の災害にもまさる大きな衝撃でした。

成金を簇生させた大戦中の好況はアッという間に去り、不況は年ごとに深刻化していきました。1927年昭和金融恐慌、1929年世界大恐慌、グレート・デプレッション日本だけでなく資本主義全体が崩壊に瀕していました。冷害による兇作と重なって、東北の農村はとくにひどい状態でした。娘の身売りが大きく社会問題化した時代でした。

資本主義帝国主義を打倒して社会主義建設の途についたソ連だけが恐慌と無関係で、五ヶ年計画によって経済的發展をつづけていました。社会主義は多くの心ある若い知性にとって、明日の社会を予約する歴史的必然と思われたのでした。

大恐慌からの脱出は、アメリカではニューディールによって、ヨーロッパではナチの暴力的人種主義的全体主義によって、そして日本では天皇制軍国主義的対外侵略によって遂行されました。1931年満州事変に始まる日本の大陸侵寇です。コミンテルンはそれを「強盗戦争」としていました。

以後、自由と人権を守ろうとする抵抗は、個人的にも組織的にも脆くもくずれさって、忠勇無双のわが国民は産業報国会へ大政翼賛会へ殺到し、果ては一億一心火の玉となって1945年8月15日の

敗戦へと盲進するのです。そんな時代だったのです。

(2) 文化的思想的背景について

次に文化的思想的背景です。これも、第一次大戦で歴史の土台に大転換があったのですから、当然その上部構造にもそれに相応する変化が起こりました。社会主義を志向する新しい潮流です。文学と演劇に限って、私自身の記憶をもとにしてお話しましょう。とはいっても、昭和初期というと私の中学生の頃ですから、少年の私が直接読んだり見たりしたものはごくわずかですが。

文学はプロレタリア文学の全盛時代でした。徳永直の「太陽のない街」、小林多喜二の「蟹工船」「不在地主」「東俱知安行」など、わけもわからずながら胸をおどらせて読んだものです。レマルクの「西部戦線異状なし」も読みました、感動しました。あとで、あれは唯の反戦文学にすぎぬ、階級の見方が薄弱だ、と聞かされて、少しがっかりしたのを憶えています。

演劇では、小山内薫・土方与志たちの築地小劇場を本拠とした新劇が新鮮な刺激的な魅力でした。チューホフの「桜の園」やゴリキーの「どん底」やトレチャコフの「吼える支那」などです。ラーネフスカヤ夫人役の東山千栄子のことを「華族の家柄のお嬢さまがねえ、えらいねえ…」と、母が感嘆していたことも憶えています。古い時代の黄昏が、新しい時代の黎明が肌で感じられる雰囲気でした。

時代のこの雰囲気を知っていただくために、ここで私は、有島武郎と芥川竜之介の2人をその象徴的存在として挙げたいと思います。この2人は、とくに有島は、今では忘れられかけているといえるかも知れません。しかし当時は、大正末から昭和初めにかけては、ジャーナリズムを賑わせた最も著名な作家でした。私の姉は日本女子大の国文科を1929年に卒業していますが、卒論のテーマは「有島武郎論」でした。「とても論文などといえるものではないの、ただの感想作文よ、南京豆をポリポリかじりながら一週間で書きあげた」なんていってました。ともかく「惜みなく愛は奪ふ」など、当時の女子学生に大もての作家でした。黒い布装の『有島武郎全集』全10巻があったのを憶えています。ただし私がそれを読んだのは

高校へ入ってからですが。

有島の「宣言一つ」が発表されたのは1922年1月、総合雑誌『改造』の新年号でした。わずか12、3枚の短い論文ですが、その反響は大へんなものでした。有島の主張は一口にいえば知識階級無用論です。第四階級（プロレタリアート）は今や、自らの生活に根ざした理論と実践をもって自らを解放しうるに至ったのであって、知識階級からの思想的理論的支援ないし指導など必要としない、否、かえってそれは有害である。自分のようにブルジョアの階級に生まれ育ち教育をうけた者は、余計な差し出口をすべきでないし、またその資格もない、「第四階級の労働者たることなしに、第四階級に何物をか寄与すると思つたら、それは明らかに僭上沙汰である」といったのです¹⁶⁾。

有島のこの宣言の背後には、彼の精一杯の実践が、社会主義に労働運動に当時誰よりもいちばん接近した実践があったことを見落としてはならないと思います。そんな彼であったからこそ、この小さな「宣言一つ」が大きな波紋を生じたのです。たしかにそれは、あまりに単純でした、素朴でした。あまりに幼稚といってもいいでしょう。事実、彼自身が「私は今43ですけれども心の発達未熟な点からいふと10年若い33位だといつていいと自分で思つてゐます」と河上肇宛の手紙で書いています¹⁷⁾。

だが、彼の幼稚さは、同時に彼の純粹さの現われでもあったのです。幼稚なまでの彼の純粹さには頭がさがります。1923年6月有島は軽井沢三笠の別墅で波多野秋子とともに自殺しますが、これも彼の純粹さ、道徳的潔癖がさせた結果です（昨年7月友人とその浄月庵址を訪ねました。弟生馬の筆になる有島武郎終焉地の碑があり、傍らにスイスの少女チルダへの英文の手紙の1節の碑がありました。波多野秋子の名は見当たりませんでした）。

「宣言一つ」とともに有島で忘れてならないことは、父から相続した北海道羊蹄山麓の狩太農場450町歩を無償で小作人に解放したことです。「宣言一つ」を発表したその年のことです。彼はかねがね、生産手段の私有を罪悪と感じていたのです。それは彼の良心の苛責となっていたのです。

解放しても、借金の抵当にとられたりして、すぐまた資本の支配下に組み敷かれてはなんにもならないし、そうなることは目に見えていましたから、彼は解放した農地を元の小作人各自の私有とはせず、あらかじめ周到な計画をたてて協同組合的経営の共産農団としたのでした（共産とは物騒でいけない、という周囲の意見に従って、名称は共生農団と改めましたが）。有島の念頭にはソ連のコルホーズがあったのでしょうか。

以上のように、私も有島のなかに時代の苦悩と救いとを最も純化した形で認めることができるのではないかと思います。

次は芥川ですが、彼は有島にくらべると、現代の若い人たちにも遙かによく知られていると思いますし、また、資本主義や第四階級の問題に、有島のように全身で体当たりしたのでもありませんから、賢治の「農民芸術論」との関係では特にとりあげる必要はないのですが、一つだけ、彼の自殺の1月前に書かれた「或阿呆の一生」のなかの「傾向詩」を思い出していただきたいと思ったのです。

——誰よりも十戒を守つた君は
誰よりも十戒を破つた君だ。

誰よりも民衆を愛した君は
誰よりも民衆を軽蔑した君だ。

誰よりも理想に燃え上つた君は
誰よりも現実を知つてゐた君だ。

君は僕等の東洋が生んだ
草花の匂のする電気機関車だ。——¹⁸⁾

ここで「君」といっているのは、レーニンのことです、断るまでもないと思います。

芥川についてこれだけではやっぱりお粗末すぎます。賢治の「農民芸術論」に関係のあるモリスについて彼が知っていることを一言紹介しておきましょう。「ラスキンよりモリスへ伝へたる法灯はモリスより更にショウに伝はりたる観あり、その中間に詩人、兼小説家兼画家兼工芸美術家兼社会主義者として立てるモリスは前世紀後半の一大橋梁と存候。但し老年のモリスの社会主義運動に

加はり、いろいろ不快な目に遇ひし事は如何にも人生落莫の感有之候。小生は詩人モリス、——殊に *Love is Enough* の詩人モリスの心事を付度し、同情する所少からず、モリスは便宜上の国家社会主義者たるのみならず、便宜上の共産主義者たりしを思ふこと屢々御座候。」(1927年2月17日大熊信行宛書簡)¹⁹⁾「わたしは玄鶴山房の悲劇を最後に山房以外の世界へ触れさせたい気もちを持つてゐました(最後の一回以外が悉く山房内に起つてゐるのはその為です)。なほ又その世界の中に新時代のあることを暗示したいと思ひました。チェホフは御承知の通り『桜の園』の中に新時代の大学生を点出し、それを2階から転げ落ちることにしてゐます。わたしはチェホフほど新時代にあきらめ切つた笑聲を与へることは出来ません。しかし又新時代と抱き合ふほどの情熱を持つてゐません。リブクネヒトは御承知の通り、あの『追憶録』の中にあるマルクスやエンゲルスと会つた時の記事の中に多少の嘆声を洩らしてゐます。わたしはわたしの大学生にもかう云ふリブクネヒトの影を投げたかつたのです。……なほ又わたしはブルジョワたと否とを問はず、人生は多少の歓喜を除けば、多大の苦痛を与へるものと思つてゐます……。」(1927年3月6日青野季吉宛書簡)²⁰⁾

最晩年の言葉です。時代の危機的状況が鋭い感覚で正確にとらえられています。なお年譜によると、芥川は1916年7月東大文学部英文科卒業、卒業論文は「ウィリアム・モリス研究」でした。

(3) 室伏高信の『文明の没落』と『土に還る』の影響について

有島や芥川に象徴されるこのような時代を背景にして、賢治の「農民芸術論」に直接影響をあたえたのが室伏高信の文明批評的著書『文明の没落』と『土に還る』とです。そのことを私は、上田哲の『宮沢賢治——その理想世界への道程』²¹⁾によって初めて知りました。

室伏高信は戦前戦中、総合雑誌『日本評論』に拠って論壇に大活躍したジャーナリストです。1923年刊の『文明の没落』とその翌年刊の『土に還る』とは昭和の10年代、大東亜戦争に突入するまで、百版を重ねるロングベストセラーでした。内容は、機械文明・都会文化は資本主義が生んだ

徒花であること、その資本主義が今や没落に瀕していること、農村の生活こそ人間にとって最も自然な健全な、人間らしい人間の生活であること、を主張したものです。経済不況が深刻化していた時代ですから、社会救済の方向を指示するものとして世の喝采を浴びたのも頷けることです。

賢治がこの室伏の著書を読んで、大いに啓発もされ、我が意を得たりと、大いに自信を強めもしただろうこと疑いありません。上田は、賢治の「農民芸術の興隆」と室伏の『文明の没落』とを対照して、その言辭に全くまたは殆ど全く同じ表現が幾つも見出せることを指摘しています。例えば、賢治は「人口の一割がそれを買ひ鑑賞し享樂し九割は世々に勞れて死する」といっていますが、室伏は「人口の一割がそれを買ひ、鑑賞し、享樂する。人口の九割は世々この芸術を味ふことなく、労働して、疲れて、死する」といっています。また、賢治は「芸術の回復は労働に於ける悦びの回復でなければならぬ Morris "Art is man's expression of his joy in labour." / 労働は本能である 労働は常に苦痛ではない / 労働は常に創造である。創造は常に享樂である」といっていますが、室伏は「労働は今日は正しく苦痛である。墮落である。不名誉である。ウキリアム・モリスは芸術をもつて労働における喜びの表現——Art is man's expression of his joy in labour——だといふた。労働における喜びの喪失とともに芸術は終りを告げたのである。芸術の回復はそれゆゑに労働における喜びの回復でなければならぬ。……(人間は)労働を本性的に要求する動物である。……労働は常に苦痛でない。……われわれの求めるものは労働の享樂なのだ。そこに生命がある。創造がある、芸術がある」といっています。ご覧のとおり、論説の主旨も表現もそっくり同じです。それもそのはず、賢治は国民高等学校の講義用に室伏の著書から抜き書きしながらメモを作った、そのメモがこの「興隆」だったのですから。

室伏の賢治へのこのような影響を上田によって学び知らされたとき、正直のところ私は少々がっかりでした。彼の『青年の書』などを通して私が知っていた室伏は、時局便乗型の浅薄な評論家だったからです。だがこれは私の方が浅薄でした。

昭和の2、3年頃までの室伏には、即ち賢治が読んだ室伏には確かに資本主義の矛盾を突いた現状批判として耳を傾けるべきものがあつたのです。

それはともかく、このように、賢治の「農民芸術論」はさまざまな直接的間接的影響のもとに成立したものでありますが、そのことは賢治の独創性をいささかも傷つけるものではありません。「綱要」のあの高らかな張りつめた呼びかけ、それは賢治その人そのものです。「おお朋だちよ君は行くべく やがてはすべて行くであらう」こんな言葉が賢治以外の誰から聞けるでしょうか。

III <農民芸術>の農民概念について

<農民芸術>というなら「同時に<労働者芸術>や<商人芸術>など職業の数だけの芸術を設定しなければおかしいということになる」²²⁹といった疑問もあるようですから、賢治の農民概念について最後に一言しておきます。それは私にとってあんまり自明のことでしたので、これまでついうっかり見落としてきました。

まず結論から申しますと、賢治のいう農民とは、現に農業という分業の一つに従事している農民を指すだけではありません。彼は、自然のなかで自然とともに生きる農民の姿に、真に人間らしい人間の在り方を見出したのです。そしてまた、「アダムが耕しイヴが織ったとき誰が殿様だったか」²³⁰といった標語が示しているように、生活必需資料を自らの労働によって稼ぐ生き方こそまともな人間の生き方だ、農民の生活が正にそれだ、と彼は考えていたのです（分業については、若き日のマルクスが興味深いことをいっています。註の24を参照して下さい）。

こうした考え方は、何も賢治一人に限ったことではありません。類縁をたどれば、トルストイに傾倒した徳富蘆花や白樺派（新しい村）などがあります。さらに溯れば安藤昌益の直耕賛美にまで上れるでしょう。「農は国の本なり」という所謂農本主義は、思想的には右から左までさまざまですが、それらを底部で一貫する一筋の何かがあるような気がします。自然への復帰という人間の本能的願望でしょうか。もちろん賢治の農民もその例外ではありません。賢治は地人という言葉も使っています、地人は彼の独創ではないでしょう

が、この方がよりびったりだと思います。

羅須地人協会とは少し違った空気ですが、やはり同質の理想を求めて農耕生活に入っていた例を私は一つだけ実見しました。豊多摩郡高井戸村の江渡狄嶺さん²³¹の百姓愛道場です。「美的百姓」徳富蘆花の粕谷村恒春園から北へ1、2キロのところだったように記憶します。戦時中のことでした。これも記憶がはっきりしませんが、昭和18年の初夏の頃ではなかったかと思います。吉田清太郎先生²³²のお伴をしておうかがいしたのです。岩本和気子さんが案内して下さいました（吉田先生は当時市ヶ谷の岩本家に居候していらっやした）。

当時のこと、思い出そうとすると、すればするほど記憶は霧の彼方へ遠のいていってしまいます。きれぎれの断片をいくつかお話ししましょう。

吉田先生は80歳のご高齢でした、驚きました（なにをいうか、自分が今80歳ではないか、いや、これは二重の驚きです）。そんなご高齢なのに、電車に乗って空席があると誰かを座らせようとなさる。吊皮を握って立っている先生の方が私は心配でした。

江渡さんのお住いは茅葺きの幾棟かの百姓家でした。その1棟に十ちゃん（幼少のとき昇天した江渡さんの愛児）の遺骨が安置してあり、その部屋で吉田先生の司会で小さな集会が持たれました。先生は讚美歌を調子はずれの大きな声で歌われました。木の葉を1枚手にとって、神が、神の奇蹟がそこに現在することを説かれました。

狄嶺さんにはお目にかかれませんでした。お留守だったのでしょう。葉だ、葉だ、といて深く悔いておられたあのアル中症状のためではなかったと思います。

集会が終って、昼食のご馳走になりました。畑でとれた新鮮なトマトや胡瓜が出たにちがいないと思うのですが、憶えていません。ただ、缶詰めのコンビーフだけをハッキリ憶えています。戦中です、めったにお目にかかれるものではありません。きっと吉田先生のための取っておきの貴重品だったのでしょう。

この日は私にとって久し振りの静かな幸せの一日でした。戦争熱一色の世の中に、その片隅で神の愛に思いを致すこんな小さな空間があったこと

は、その頃賢治の詩だけを心の支えにしていた私にとって、ほんとに驚きでもあり喜びでもあり無上の慰めでもあったのです。

この次は是非江渡さんご自身にお会いしたいと思っていたのですが、果たせませんでした。翌年(?)岩本和气子さんが江渡さんの急逝を報せてくれました。腸捻転だったそうです。江渡さんの百姓愛道場について最後にひとこと申しますと、そこには強い意志と信仰のリゴリズムが支配していたように思います。それに較べて、賢治の羅須地人協会には、彼の固い法華経信仰にもかかわらず、ときにハメをはずすほどの喜び楽しみ笑いがあったのではないか、そんな違いを感じます。

以上で私の話をおしまいとしますが、一つ蛇足を加えさせていただきます。それは、賢治は皇室について戦争についてどんな態度をとったか、という問題です。戦後、平和と民主主義の世の中になって、賢治をもてはやすには、賢治が平和と民主主義の擁護者でなくては都合が悪いわけで、従って、賢治と天皇制とか、賢治と侵略戦争とかいった問題には敢て触れないでいくという傾向がみられますが、これは間違いでしょう。賢治の全体像をまっすぐ見据える必要があると思います。で私の答えは、賢治は皇室には敬虔な尊崇の念をもっていたし、戦争にも肯定的だった、ということです。これについてはまた別の機会でお話しましょう。

(せきど よしみつ 名誉教授)
(1995. 9. 28 受理)

註

- 1) 『校本宮沢賢治全集』第12巻上、7～20頁(筑摩書房、1973～77年刊)
- 2) 同上、第14巻、771～779頁。
- 3) 同上、779～782頁。
- 4) 同上、第12巻上の月報。
- 5) 『内村鑑三全集』第18巻、304～315頁(岩波書店、1981年刊)
- 6) 谷川徹三『宮沢賢治の世界』81頁(1970年、法政大学出版局刊)
- 7) 中村 稔『宮沢賢治』(1970年刊、筑摩叢書)
- 8) 同上、165頁。
- 9) 同上、39頁。
- 10) 『人権と教育』20号(1994年、社会評論社刊)

- 11) 前掲『校本宮沢賢治全集』第6巻、97頁(詩ノート、作品1016、1927. 3. 26)
- 12) 天沢退二郎『宮沢賢治の彼方へ』(初版1968年、増補改訂版1977年、新增補改訂版1987年、思潮社刊、1993年筑摩文庫版は新增補改訂版による、引用の頁はこの文庫本による)
- 13) 同上、262～263頁。
- 14) 同上、277～278頁。
- 15) 同上、277頁。
- 16) 筑摩書房『現代日本文学大系35、有島武郎集』367頁(1980年刊)
- 17) 同上427頁、本多秋五「有島武郎論」より、手紙の日付は大正9年6月8日。
- 18) 『芥川龍之介全集』第8巻、130頁(岩波書店1955年刊)
- 19) 同上、第18巻、205～206頁(昭和2年2月17日付大熊信行宛書簡)
- 20) 同上、208頁(昭和2年3月6日付青野季吉宛書簡)
- 21) 改訂版、1985年、明治書院刊。
- 22) 北川 透「農民芸術概論をめぐって」(『新修宮沢賢治全集』別巻、280頁、筑摩書房刊)
- 23) ジョン・ボールの言葉。ボールは14世紀イギリスの聖職者、ウィクリフの宗教改革の思想を支持し、社会的不平等に反対して闘った。農民一揆ワット・タイラーの乱で指導者の1人であった。農民軍は一時勝利したが、首領タイラーが1381年6月15日に殺されたため瓦解した。ジョン・ボールも7月15日に処刑された。
- 24) マルクス(とエンゲルス)によると、分業は階級社会の成立とともに発生したのである。従って階級が無くなれば、即ち共産主義社会になれば分業も消滅する。「共産主義社会では、各人はそれだけに固定されたどんな活動範囲をも持たず、どこでも好きな部門で、自分の腕を磨くことができる。社会が生産全般を統制しているのである。だからこそ、私は、したいと思うままに、今日はこれ、明日はあれをし、朝に狩猟を、昼に漁撈を、夕べに家畜の世話をし、夕食後に批判評論をすることが可能になり、しかも、決して猟師、漁夫、牧夫、評論家にならなくてよいのである」(『新版ドイツ・イデオロギー』花崎皋平訳、合同出版、1966年刊)。それは生産力が高度に発達した未来のことではあるが、マルクスがこのような空想を描いたことは興味深い。マルクス主義が空想社会主義を斥けて科学的社会主義になって以来、教条化し硬化化した、と私は思っている。
- 25) 江渡狄嶺、本名は幸三郎、青森県上北郡五戸町の生れ。隣村倉石村出身の田中修君(元北海学園大学学長、1992. 9 没)の父上が姻戚関係の縁で親交が

あった由、また修君も中学のとき江渡家に寄宿してそこから通学した由。旧制二高卒、経歴の詳細を知りたいと思っている（私は生没の年月日さえ知らない）。著書に『或る百姓の家』（1922年刊）『地涌の姿』（刊年1942年頃か？）その他数点がある。彼は人間の生活を3つに分類して、一、生産労働の生活、二、行乞の生活、三、詐取強奪の生活とした。

26) 吉田清太郎、1863年（文久3）四国松山に生ま

れ、1950年1月22日没。1883年同志社に入学、翌年受洗。『愛の行者』として知られた。自ら貧書生でありながら、同志社学生時代の山室軍平を経済的に援助するなど貧者への愛の実践に一生を捧げた。猫の死骸を神から与えられた糧と頂いて食べたという逸話は有名である（『キリスト教人名辞典』1986年、日本基督教団出版局刊、を参照）。